

第42回茨城国語教育学会研究発表会国際シンポジウム

日時：2024年3月9日（土） 受付 13:00～13:30

場所：茨城大学教育学部D棟201教室

○特別講演「魯迅と日本文学」

鄒 波

復旦大学日文系准教授・主任 文学博士

専門分野は日本近現代文学・日中比較文学



○学生活動報告

国際芥川龍之介学会上海大会体験記 西牧 花

(茨城大学教育学部3年)

○パネルディスカッション

司 会 齋木 久美 (茨城大学教育学部)

登壇者 鄒 波

鈴木 一史 (茨城大学教育学部・中学校国語教科書編者)

宮崎 尚子 (茨城大学教育学部)

中村 麻里那 (茨城大学教育学部附属中学校)

李 満紅 (茨城大学教育学部)

講演要旨

魯迅（1881—1936）は日本文学と深い縁がある。日本に留学している間、魯迅は夏目漱石の『吾輩は猫である』や『虞美人草』などを愛読していた。帰国後、弟の周作人と『日本現代小説集』を翻訳した。魯迅は夏目漱石の『懸物』と『クレイグ先生』を翻訳し、自分の創作で共鳴している。1921年6月、芥川が北京旅行中、魯迅は『鼻』と『羅生門』を翻訳した。1921年12月に魯迅の代表作『阿Q正伝』を連載しはじめた。この作品を精読すれば、魯迅の芥川作品に対する理解と共鳴がうかがえる。『阿Q正伝』と『鼻』はいくつかの共通点を持っている。まず視覚と身体、すなわち「見られる身体」という重要なテーマが挙げられる。それから自尊心と身体改造のドラマティックな展開も看過できない問題である。こうした問題を解明するには、作品の読み比べはいうまでもなく、視覚と身体をめぐる魯迅の個人的体験や近代アジアの歴史的経験も考察しなければならない。（鄒波）

[参加申し込みフォーム（リンク）](#)

